

鎌倉時代語研究 第一輯 目次

高山寺蔵「三宝絵」詞章遺文

小林 芳規 一頁

高山寺蔵鎌倉時代後期書写題未詳仏書法釈書

柳田 征司 二五頁

国語史料としての真福寺蔵新樂府注正嘉元年書写本

栗田 隆 四三頁

「打聞集」における漢字の用法

東辻 保和 六一頁

金沢文庫蔵 仏教説話集の漢字字体

山内洋一郎 八五頁

藤原定家自筆平仮名文三種における和語表記の漢字

村田 正英 一〇五頁

吳音説資料の検討

沼本 克明 一二三頁

——声点の加點法の相違と学統との関係について——

院政鎌倉時代の漢語サ変動詞語彙の比較研究
六文獻における

佐々木 威 牧野 泰子 一四三頁

——特有語彙と共有語彙の観点から——

最明寺本寶物集総索引稿 (一)

菅原 範夫 一六五頁

鎌倉時代語研究文献目録稿

金子 彰 二二三頁

高山寺藏「三宝絵」詞章遺文

小林芳規

目 次

- 一、新出の高山寺藏「三宝絵」詞章について
- 二、高山寺藏本と興寺観智本との比較
- 三、高山寺における三宝絵の受容
- 四、(翻刻)高山寺藏「三宝絵」詞章

一、新出の高山寺蔵「三宝絵」詞章について

源為憲が、永観二年（九八四）十一月に、冷泉院第二皇女の尊子内親王に御覽せさせんとして、作成した「三宝絵」は、今日、三種類三点の伝本が存している。第一種は、漢字文り平仮名文であり、巻中の大部分と巻下の一部を存する断簡である。その書写は、巻下の奥書「保安元年六月七日書うつしおはりぬ」により院政初期、保安元年（一一二〇）であることが分る。現在、東大寺切として、その断簡が諸家に散在するが、関戸有彦氏蔵の冊子一帖が最も多くを伝えている。第二種は、漢字片仮名文り文であり、巻上・巻中・巻下及び総序を携つ完本である。その書写は、巻下の奥書に「文永十年八月八日中未刻書写了 戸下二十石三善朝臣（花押）」、（別筆）「東寺寶泉院本」とあるのにより、鎌倉中期文永十年（一一七三）であることが分る。東寺観智院に伝えられ、古典保存会の複製本三冊によってその全容が知られる。第三種は、和化漢文であり、これに部分的に平仮名の施されたものである。巻上・巻中・巻下を存するが、「寛喜二年（一一三〇）庚寅三月十九日（巻上・巻中は廿日、巻下は四月九日）」於らば、比較考索の作業はもつと容易であつたに違いない。

所が今般京都洛西の梅尾高山寺の経蔵から見出された、三宝絵詞章の遺文は、漢字文り片仮名文であつて、東寺観智院本とは文章の表記が同じ種類であるが、字句などには異同が多くて、別種の伝本の出現として注目されるのである。

新出の高山寺蔵三宝絵詞章の一帖は、今回の高山寺典籍文書綜合調査団の経蔵調査によって見出されたものであつて、高山寺聖教類第四部第八七函二四号として整理されたものである。室町初期書写で、料紙は楮紙を用い、これ左袋綴に仕立てた柙型本で、綴二三・五廻、横二一・〇廻、表紙共五丁の冊子である。三宝絵の文章は、一丁表から三丁表までに一頁十一行平均に書かれ、その内容は観智院本と比べるに、巻下の七月、「孟蘭盆加自恣」の全文に当っている。紙背には漢文及び平仮名文り文の文書があり、表紙に「東第廿箱」「奉書写 定光」「定光」「舍利礼一遍」及び外題等の文字、見返しには「三宝繪言葉」「國語」「神通自在 道礼」「奉書寫 舍利礼 舍利」「三寶繪言葉内之」等の文字があるが、奥書は無い。三丁裏以下は三宝絵詞章とは直接

醍醐山西谷書写了「求法沙門教賢生年」の奥書のある本を、江戸時代の正徳五年（一七一五）六月中幹に「覆摹」したものである。その奥書に、
行三宝絵三卷者（抄）近院前大僧正有雅所献也
乙未之夏借其旧本而覆摹之 遂加再校以収書庫云
正徳五年六月中幹 養民堂主人識

とあるのによると、親本は醍醐寺に伝わつて来たものであることが知られる。覆摹本は前田家尊経閣に伝えられる。

これらの三種類の三本は、相互に、文章の表記が異なる上に、字句にも異同があつて、三本間の関係を明らかにするのに有益である。しかし、その詳細な比較考索も、更には為憲の原着の内容を推定することも、課題として多くが残されて来た。その一因としては、三つの種類のそれぞれに属する伝本が、一本ずつだけであつたことが挙げられる。平仮名文の東大寺切、漢字片仮名文り文の東寺観智院本、和化漢文の前田家本が、各一本ずつしか伝わつていないために、比較考索には、いきなり表記の異なる三種類の伝本を取上げることになつてしまつたのである。若し、同一表記の伝本中に系統の異なる諸本があつて、それらが親子関係、或いは兄弟関係にあつたな

に關係なく、三丁裏には「一心頂礼万徳円満釋迦如来」以下六行の経文、四丁表には「初発心時便成正覺具足患身」等及び習書様の字句が書かれ、四丁裏（即ち裏表紙に当る）には、「梅尾高山寺方便智院」等の文字がある。表紙外題は、

三宝繪言葉
孟蘭盆供事 加自恣

とあり、内題は、
孟蘭盆供 加自恣
とある。以上が新出本の書誌の大要である。

この高山寺蔵三宝絵詞章の全文は、本稿の末尾に翻字して示した。この新出本は、従来の三宝絵から得られた知見に対して、新たに付加える点として一見して先ず次の二点がある。

第一は、その書名が「三宝繪言葉」とある点である。この文献には、外題に「三宝繪言葉」とある。「葉」は十部破損しているが、明らかに「三宝繪言葉」とあり、左端にも「三寶繪言葉内之」とあり、しかも見返の字句は表紙の文字と通ずるものが多いから、外題も「三宝繪言葉」であつたと見られる。一体、源為憲著のこの作品の名称には、「為憲記」